

については表を省略した。なお、今回の「モテる条件」「評価する条件」、およびその差についての議論では、回答内容を異性愛者によるものと仮定して議論を進めている。むしろそうではない性的指向を持つ回答者がいることはじゅうぶん想定されるし、そういった回答者への配慮として質問文も修整したが、全体的な傾向の変化をみるという観点から今回はこのような対応となったことをご了承ください。

- 18) 男性回答者による「(男性が) モテるための条件」についての割合の数値から、女性回答者による「(男性を) 評価する条件」についての割合の数値との差を計算した(女性についても同様)。なお、異なる回答者による回答結果を計算しているため、この表については回答者数(n)を記載していない。
- 19) 「このような『優しい関係』を取り結ぶ人びとは、自分の身近にいる他人の言動に対して、つねに敏感でなければならない……互いに感覚を研ぎ澄ませ、つねに神経を張り詰めておかなければ維持されない緊張に満ちた関係の下では、対人エネルギーのほとんどを身近な関係だけで使い果たしてしまう」(土井 2008: 11) と表現されるものである。
- 20) うち、B1 から B18 までの 18 項目は、「90 年調査」において人格類型のクラスター化に用いられた項目である。
- 21) 87 年論文における因子構造、および前回論文における因子構造を元に便宜的に分類した。
- 22) 「社交性に関わる項目」として、「B2 友人の数は多いほどいい」「B10 一人であることが好きだ」「B13 気の合う友人とだけつきあいたいと思う」「B16 人見知りするほうだ」、「自信に関わる項目」として、「B4 一般に自分の感覚に自信がある」「B5 誰にも負けない自信がある分野がある」「B8 人の上に立つのが好きだ」「B9 自分は『物知り』である」、「消費に関わる項目」として、「B1 広告の印象に左右されるほうだ」「B12 自分はおしゃれなほうだ」「B18 衝動買いをするほうだ」が該当すると考えられる。
- 23) 他、「F1 自分がどんな人間かわかっている」「G3 現在、憧れの人がいる」においても回答傾向に変化がみられるが、これは調査法上の問題として、質問文を変更した故の効果と考えられる。「F1 自分がどんな人間かわかっている」は 15 年においては「q19.4 自分がどんな人間かわからなくなる時がある」、「G3 現在、憧れの人がいる」は「q19.2 憧れの人がいる」

に変更となった。そのため、一見すると大きな変化にみえるものの、単純比較が不可能になってしまったことに留意されたい。

- 24) 実際に同質的な行動を取るというよりは、意識としての同質化志向がある、ということに留意されたい。
- 25) ただし、90 年から 09 年までは「耐えられないこと 1 番目」「耐えられないこと 2 番目」「自分を表現できるもの 1 番目」「自分を表現できるもの 2 番目」、というように 1 番目 2 番目の項目を質問していたのに対して、15 年調査においては「最も耐えられないこと」「最も自分を表現できるもの」と一つだけ質問する形式に質問文が変更されている。この質問文の変更のため、回答傾向が大きく変わり単純な比較が不可能になった点には留意されたい。
- 26) 特に、15 年調査においては「無回答」の増加が顕著であった。表 6-2 および表 6-3 中には記載していないが、「耐えられないこと」について、杉並区で 12.7%、松山市で 8.9% が、また「自分を表現できるもの」については、杉並区で 25.1%、松山市で 17.8% が「無回答」となった。「無回答」の増加には様々な解釈が考えられるが、おそらく質問項目数を減らしたことがかえって回答者の負担を増加させたものと考えられる。調査設計における反省として、今後に活かしていきたい。
- 27) 質問項目について、選択肢はおおむね同じだが、「90 年調査」では「時間を多く割くものから順に 3 つ以内」を回答させ、「05・09・15 年調査」では「あてはまるものすべて」を尋ねたあとに「もっとも大切な趣味」を聞いている。表 7-1 では、「90 年調査」についてはもっとも時間を多く割くものを、「05・09・15 年調査」については「もっとも大切な趣味」を集計した。ただし時代に合わせて、いくつかの項目について改変が行われていることも付記しておきたい。「6. ゴルフ」「7. ディスコ」「14. 電話あそび」「15. アマチュア無線・パーソナル無線」は「90 年調査」のみの項目であり、「ライトノベル読書」「鉄道関係」「ファッション」は「05 年調査」、「お菓子作り」は「09 年調査」からの項目である。よって年度ごとに多少の項目の増減があり、経年比較の上ではこの点に少し留意する必要があるといえるだろう。なお順位については、ここでは全年度に共通した項目だけに限定せず、各年度内の項目全てを含

んで付けている。

- 28) ただし、「15年調査」からは、項目が「テレビ・PCゲーム・スマホアプリ・携帯機、ゲームセンターなど」と変更されていることについては留意が必要だろう。
- 29) ただし、この項目は「90年調査」では「週1度以上」と回答したものの割合を、「05年調査」以降は「一日30分以上」と回答したものの割合を、集計したものであり、比較にはやや留意すべきであることを付記しておきたい。
- 30) この点については、両義的なとらえ方が可能であろう。すなわち、今後を見定めなければならないが、それは「大きな社会」へと向かう際の「ホームベース」のようなものとして役立ちうるかもしれないし、逆に撤退する際の「シェルター」となりうるものかもしれない。

参考文献

- 阿部真大, 2013, 『地方にこもる若者たち—都会と田舎の間に出現した新しい社会』朝日新聞出版。
- 新谷周平, 2007, 「ストリートダンスと地元つながり」本田由紀編『若者の労働と生活世界』大月書店: 221-252。
- 浅野智彦編, 2006, 『検証・若者の変貌—失われた10年の後に』勁草書房。
- 浅野智彦, 2011, 『趣味縁からはじまる社会参加（若者の気分）』岩波書店。
- 浅野智彦, 2015, 『「若者」とは誰か（増補新版）—アイデンティティの30年』河出書房新社。
- 浅野智彦, 2016, 「青少年研究会の調査と若者論の今日の課題」藤村正之・浅野智彦・羽瀧一代編『現代若者の幸福—不安感社会を生きる』恒星社厚生閣: 1-23。
- Bauman, Zygmunt, 2011, *Culture in a liquid modern world*, Polity (= 2014, 伊藤茂訳『リキッド化する世界の文化論』青土社)。
- Bolz, Norbert, 1997, *Die Sinngesellschaft*, Econ Verlag (= 1998, 村上淳一訳『意味に飢える社会』法政大学出版局)。
- 電通若者研究部編, 2016, 『若者離れ—電通が考える未来のためのコミュニケーション術』エムディエヌコーポレーション。
- Dunbar, R. M., 2010, *How Many Friends Does One Person Need?*: Faber and Faber, London (= 藤井留美訳, 2011『友達の数は何人?』, インターシフト.)
- 土井隆義, 2008, 『友だち地獄—「空気を読む」世代のサバイバル』筑摩書房。
- 古市憲寿, 2011, 『絶望の国の幸福な若者たち』講談社。
- Furlong, A., Cartmel, F., 1997, *Young People and Social Change(second edition)*, Open University (= 乾彰夫・西村貴之・平塚真樹・丸井妙子訳, 2009『若者と社会変容—リスク社会を生きる』大月書店)。
- Giddens, Anthony, 1991, *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*, Polity Press (= 2005, 秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳『モダニティと自己アイデンティティ—後期近代における自己と社会』ハーベスト社)。
- 濱野智史, 2012, 「デジタルネイティブ世代の情報行動・コミュニケーション」小谷敏・土井隆義・芳賀学・浅野智彦編『若者の現在 文化』日本図書センター: 63-106。
- 原田曜平, 2013, 『さとり世代—盗んだバイクで走り出さない若者たち』角川書店。
- 乾彰夫編著, 2006, 『不安定を生きる若者たち—日英比較 フリーター・ニート・失業』大月書店。
- 岩間夏樹, 1995, 『戦後若者文化の光芒—団塊・新人類・団塊ジュニアの軌跡』日本経済新聞社。
- 岩田考・羽瀧一代・菊池裕生・苦米地伸編, 2006, 『若者たちのコミュニケーション・サバイバル』恒星社厚生閣。
- 片桐新自, 2008, 『不安定社会の中の若者たち—大学生調査から見るこの20年』世界思想社。
- 片瀬一男, 2015, 『若者の戦後史—軍国少年からロスジェネまで』ミネルヴァ書房。
- 川端浩平, 2013, 『ジモトを歩く—身近な世界のエスノグラフィ』御茶の水書房。
- 香山リカ, 2002, 『ぶちナショナリズム症候群—若者たちのニッポン主義』中央公論新社。
- 北田暁大, 2002, 『広告都市・東京』廣済堂出版。
- 北田暁大・新藤雄介・工藤雅人・岡澤康浩・團康晃・寺地幹人・小川豊武, 2013, 「若者のサブカルチャー実践とコミュニケーション—2010年練馬区『若者文化とコミュニケーションについてのアンケート』調査」『東京大学大学院情報学環情報学研究』